

倉橋惣三への一つの接近（その四）

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本田 和子

◆ 終章

① 二つの「徴」

倉橋惣三は、「たけくらべ」を論じたその一文を、次のように結んだ。すなわち、「かくて、美登利の思いは、時雨にぬれる紅べに入友仙のいじらしい姿に終わり、信如の思いはある霜の朝格子門に、水仙の作り花となって終わる。どこまでも児童の世界を世界としたこの作の、余韻をだに大人の世界へ引き延ばしてないこと

ろが嬉しい。『たけくらべ』は児童描写文学の最も純なるものである」と。^{*1}

物語世界における子どもの時間は、このような形で幕を降ろし、子どもたちは、それぞれに「子どもであること」に訣別した。そして、倉橋は、巢立っていく彼らのありようを、右のように、文脈の中から二つの隠喩を抜き出すことで、物語ろうとするのだ。すなわち、「時雨にぬれる紅友仙」と、「水仙の作り花」と……。

子ども仲間の女王であった美登利は、一人の「女」へとメタモルフォーゼした。くり返し述べてきたように、その後の彼女に訪

れるのは、遊里の女として春を驚ぐ日々である。異性との交わりも、遊廓という囿われた空間の中で、夜の仇花として開花し、昼の光の下では結実することもなく、束の間の生命を終えることだろう。それは、さながら、差し出された友仙の一切れが、濡れた路上で時雨に叩かれ、想う人の手に取られることもなく、空しく色褪せていくのに譬えられる。雨にじんで流れ出す紅の色は、幼い遊女が流すであろう血涙であり、ふみつけられ、泥にまみれて朽ちていく布きれは、彼女の無惨な肉体である。

作者である一葉は、同じ性に連なる「もの書き」として、少女が「男」になり得ぬことの悲しみを、誰よりもよく、知っていたのであった。

これに比して、「男」へと歩み出す信如の後姿は、「水仙の作り花」で飾られる。しかも、花の贈り主は今日を限りに遠くへ去ったが、その花は、想い人の手に取られ、違い棚に飾られて清らかな姿をいとしまれる。以後再び、会うことも難い自身の姿を、朽ちぬ作り花に託して残される者の中にとどめようとは、当人の意図を超えて、残酷な所業であろう。枯れることを知らない造花があらわにするのは、「いつまでも変ることがない」という愛のしるしであろうか、それとも、「少年の日の愛は、所詮、虚構のものでしかない」という、冷い告白なのだろうか。

いずれにせよ、「紅入り友仙」と「水仙の造花」は、「大音寺前」の女性に訪れる運命の苛酷さと、男性のそれとを、鮮かに対比させる二つの「徴」なのだ。

そして、倉橋の感受性は、物語言語の文脈が浮かび上らせる二つの「徴」を、こうして、あやまたず選び出し、作品を結ぶ要として位置づけたのであった。このことは、私どもの前に、倉橋の持つ次のような特質を垣間見せている。すなわち、ことがらを把握し、或いは表現するに当って、彼は、ふさわしい隠喩によってそれを行なうのだ。この初期の論文に見られるのが、その端的な表われなのである。

② 科学と詩

倉橋の保育論は客観性に乏しく、その文章は、科学的厳密性に欠けるという批判が、時としてくり返されることがある。そして、これらの見解は、結果として、私どもを、次のような終着点に到達させようとする。彼は「学者」ではなく、子ども好きな「実践指導者」であり、そして、何よりも「詩人」だったのでないか、と。

然し、詩作を生き方の中心に置く人を「詩人」と呼ぶなら、彼

は、必ずしもその範疇になく、事実、いわゆる「詩集」と言う類いの本を刊行しているわけではない。彼の本質が、「詩人」にこそふさわしいと言われるのは、人と世界、とりわけ子どもに向けられるまなざしが、実体を究めようとして分析的・解剖的に働くのではなく、その意味を直観して象徴的表現で把握するという、そんな傾向のゆえであった。例えば、彼にとつて、母とは「教える前に慰むべき人」であり、「導く前にいたわるべき人」であった。「すべての母は悲願の母」だと言うのである。

母にまつわるこの一連の言葉は、戦前の日本の母たち、特に、倉橋が、文部省の社会教育官として遠く足を伸ばした満州の僻地で、つましく家を守った女たちのありようを、何よりもよく言い現わして妙である。昭和の初め、わが国の植民地政策の一環として、満州の奥地へ伸びる鉄道事業のない手である、職員とその家族たちは、孤独と辛苦の生涯を余儀なくされていた。一望の高梁畑の中に、点々と散在する小さな舎宅の中で、若い妻は幼児を抱き、「出張がちな夫の留守をまもって」、^{*4}「日本の子守り唄をうたつて」^{*5}いたのである。そんな母たちに対して、倉橋は、軽々しく家庭教育を説き得なかつたと言う。彼は、その時の己れのありようを、「観音三十三種の化身はかなわずとするも」、^{*6}「せめて母の哀思の一つをでも救う一助となりたい」と願いつつ、「凡力

行脚」^{*8}を続けた、と表現している。

僻地勤務の満鉄職員の妻として、海を渡ってきた女たちは、頼るべき人もなく、友人もないまゝに、早々と、母にならねばならなかつた。不順な気候や悪疫からわが子を守るべく、乏しい育児知識をかき集め、鎮守の社とも先祖の墓とも無縁の他郷で、日本人らしく成長させようとちえをしぼる。そんな揚句の、壁に貼られた富士の絵であり、日本の子守唄であつたらう。現代風の表現を借りるなら、彼女たちの現実には、「核家族」ゆえの不安定さと、「育児ノイローゼ」の危険に満ち／＼している。そんな母たちにとつては、何よりも、その存在全体をまるごと受容されることこそ肝要であり、知識を与えられるにもまして、その緊張から解かれることこそ重要なのだ。このような状況下の家庭教育を、倉橋は、「慰むべく」、「いたわるべき」母との出会い、という形で、把握し表現したのであつた。

倉橋の著作の中から、右のような例文を抜き出すことは容易である。例えば、保育者とは、子どもらの「小さき太陽」^{*9}であり、保育の意義は「温」^{*10}の一字に尽くされる。幼児の顔は夏の盛りにも「涼しく」、^{*11}大人のそれは「暑くるしく」^{*12}我執にとらわれていく。そして、「かすかにして短き心もちを見落とさない人」^{*13}だけが、子どもと共にいることが出来るのだ。こうして、倉橋の文章

は、その豊富な隱喩によって、読む者の感受性に訴え、心情を肥やすべき糧として機能する。但し、一体「小さき太陽」とは何か、「温」の保育とはどのような構造を持つのか、などと開き直るならば、時としてそれらの「言葉たち」は、多義性というペーブルの中に身をかくし、幾つかの暗示と手がかりだけを残して消えていきかねないのだ。

然しながら、先にも触れたように、倉橋は、児童研究には二つの道があることを力説していた。^{*14}すなわち、「科学的児童研究」と「文学的児童研究」がそれである。言葉を換えるなら、これは、子どもに対する複眼視のすゝめであった。そして、彼の初期の著作を通じてあらわにされるのは、この二重視力の所産である。例えば、「樋口一葉論」を公にする一方で、スタンレー・ホール、リボー、モツソーなど、当時の心理学者たちの最新の知見を紹介したりする活動^{*15}がそれである。科学的心理学の洗礼を受けた学徒として、幼児保育の趨勢が、新しい児童研究の動向と無縁ではあり得ぬことを、誰よりもよく把握していたのであろう。

にもかゝらず、その後の彼の歩みは、いわゆる心理学徒のそれではなく、「書かれたもの」もまた、いわゆる「科学的」というタイトルを冠し難いものが多い。つまり、彼のまなざしは、「科学」よりも「詩」に偏って作動したように見えるのだ。倉橋

には、「保育詩人」の称号こそがふさわしい、と言う評価が生まれてくる所似である。

こゝに、私は、倉橋の固有のありようを見る。すなわち、「幼児保育」というフィールドに密着し、そこに身を浸した彼の生き方である。幼児たちの生きた生活の中に身を置くことで、彼の感受性と直観力は、いやが上にも純化され、彼のまなざしは、その時々々に生起する現象の本質を、鋭く洞察し続けたことであろう。

然し、そのゆえにまた、幼児たちを対象化し、彼らとの間に距離を置いて、いわゆる「客観的」と称される「科学の眼」で眺めることを、倉橋の「保育的性格」が肯^{がよ}じなかつたのである。

倉橋は、その「フレイベル論」において、フレイベルの執拗なまでの理屈っぽさと教育的天才としての直截な閃きという、相矛盾する二つの面に言及している。^{*16}そして、フレイベルの眞の偉大さは、その理論にもまして、「教育的性格」にあると結論づける。「教育的性格」とは、「児童生活への直覚的な洞察力と、従って伴う、児童との率直な接触性とに他ならない」と言うのだ。^{*17}児童と一体化し得る真率性こそ、「教育的性格」の極致なのだ。

そして、彼自身もまた、己れの「保育的性格」に忠実であろうとした。幼児と一つになって生きることを是とするとき、そこから身を離し、分析と解剖のためのメスを振るうことは、肯じ難い

所業である。科学的児童研究は、それなりに進展すべきものとして、彼自身が身を置く領域ではなかった。結果として、彼の一方の眼、すなわち「科学のまなざし」は、「科学的研究の遂行」という形で己れを主張せず、「保育的性格」の中に溶かしこまれたのである。

幼児との生活の中で、「科学の眼」と「文学の眼」は、一つとなって肉体に凝縮される。倉橋は、二つの視力、二つの認識の統合者たる一箇の存在として、一人々々の幼児と向き合った。向き合った彼らは、同じ人間としての尊厳を主張しつつも、大人とは異なる独自の生の所有者として、大人を魅了し、時に困惑させる。極言するなら、彼らは、異文化集団の構成員なのだ。

従って、彼らとのコミュニケーションは、日常的な言語に依存するにもまして、彼らの身ぶりや表情、或いはかゝわりを持つ「ものたち」のたゞすまいに、依存するところが大きい。倉橋が、彼らとの交流を表現するのに、「詩的言語」を多用したのは、このゆえであつたらう。子どもたちが語り出す音声言語ならぬ表出、それらが、言語と文字の世界に姿を現わすとき、自ずから、隠喩や象徴的表現が活躍するのだ。多義的に過ぎ、科学的厳密性に欠けると評される彼の文章は、幼い人たちとの世界を、大人たちには伝えるべく、倉橋によってあらわにされた「翻訳文」のスタ

イルだったのである。

倉橋は、必ずしも、詩作を試みたのではなかった。幼児との生活において直観され、洞察された意味を、大人の世界に置き換えようとして、彼がつかまえたのが「詩的言語」であつた、と言ふことなのだ。従つて、より正確には、それは、倉橋流に編み出された「保育的言語」なのである。そして、彼をめぐる保育界の人々は、それら倉橋流の言葉と文章を通じて、幼児と共なる生活の豊かさといき／＼しさを、改めて感得し、その魅力に酔つたのである。

③ この子どもの「いま」

倉橋の保育観は、一般に児童中心主義と称され、その児童観は、「大正童心主義」と同一であるかのように、みなされることが多い。教育と呼ばれる営みが、時に、先行世代の掲げる目的や理想に向けて、子どもたちを効率よく歩ませる試みとなりがちであることを考えるなら、それらとの対比において、倉橋の保育観は明きらかに「児童中心」の名に恥じない。彼にとつては、何ものにもまして、目の前に、「いま」存在する子どもこそすべてだつただから。

然し、それは、果して「童心主義」と同義なのか、否か。「童心主義」が、内なる世界に錘を下ろし、「内在する児童性」を普遍とみなし、そこに永遠の価値を置くところから発しているのに比して、倉橋の場合は、常に「外在する他者」としての子どもが存在した。街中にも野辺にも、青山御所にも路地裏にも、遠い異郷にも、そして、絵画や文学の中にも、至るところに子どもは跳梁し、彼の視線は、絶えずそれを追い続けた。

しかも、それら「外在する子ども」は、彼に内在する「永遠の童性」と常に共鳴し、照応し合う。外在する子どもとの出会いが、内なる子どもを目覚めさせるのか、或いは、その逆であろうか。いずれが先、いずれが後とも分ち難い、絶妙の対応がそこにあった。

いわゆる「児童中心主義」を、「対象としての子ども」に依拠する教育思潮、そして、「童心主義」を、「内在する児童性」に価値を見出す思潮、と区別するとすれば、倉橋のは、両者の出会いに出現する「倉橋式子ども主義」と言い得る。人間の元型としての「児童性」と、「いま、子どもである」生きた具体とが、共に築き上げる特有の世界、それが、倉橋の保育観を誕生させる土壌なのである。

目の前に「生きた具体」として出現する子どもたちは、一人々

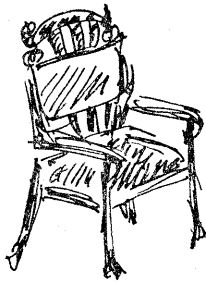
々固有のありようで己れを開示し、彼らに触発されて内なる子どもも、様々に、その多次元性をあらわにする。結果として、倉橋には、子どもとは「こういうもの」、或いは「こうあるべき」という形で、「子ども像」を描き出すことは困難であった。

倉橋保育論への批判として、しばしば、次のような見解が表明される。すなわち、「彼は、一体、どのような子ども像を目指していたのだろうか」と。彼は、恐らくは、どんな子どもの「像」をも抱くことをしなかったのではないか。「いま、目の前にいる一人の子ども」こそ、彼にとって、子どもの実在でもあり、当為でもあったのであろう。そんなありようを、彼自身も、次のように総括している。すなわち、「彼が後になって、理想の子どもとか、チピカル・チャイルドとかいうことばにあまり実感がもてなくて、各々の子どもこそ、その子どもだという具体的児童観をしつかりもち得るようになったことは、この『子供遍歴時代』(Wander Jahre)の賜と、今でも、その時の子どもたちに感謝している」と。^{*10}

私は、ここで、若き日の倉橋が、「たけくらべ」の子ども群像とりわけ、女主人公の美登利に心魅かれた経緯を追いつながら、彼の詩的なまなざしに映じたその「意味」を読み解くことを試みてきた。倉橋の前に、「子ども時代」は、瞬間々々を遊びに燃焼さ

せる無時間性と、成長という必然を負うものとしての有限性の、
両義性において出現し、美登利もまた、聖と俗との境界に位置
し、男性性と女性性、処女性と娼婦性、無垢と汚濁などの、多義
性においてその個性を主張していた。彼女と、彼女を取り巻く子
どもたちは、いわゆる「子どもは……」という言葉で括られるよ
うな「ディピカル・チャイルド」ではなかった。然し、美登利と
向き合った倉橋は、そこに紛うかたなき魅力的な少女を見、その
すべてを認め、愛したのである。

(了)



- *1 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」選集第四卷
- *2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 18 倉橋惣三「子供讃歌」選集第一卷
- *9, 10, 11, 12, 13 倉橋惣三「育ての心」選集第三卷
- *14 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」附言、選集第四卷
- *15 倉橋惣三「子供の臆病」選集第四卷
- *16, 17 倉橋惣三「フレイベル」選集第一卷